

1 アライグマの特徴

1.1 アライグマの外見と大きさ

- 頭胴長 40～60cm
- 尾 長 20～40cm
- 体 高 23～30cm
- 体 重 4～10kg (まれに 20kg)

タヌキより一回り大型。顔つきなどはタヌキやアナグマに似ますが、髭が白いこと、耳が大きく白い縁取りがあること、体色が全体的に灰色っぽいこと、尾が長く縞模様が目立つことなどから区別できます。また前肢、後肢とも指は長く、木に登ったり、物を掴んだりするのに適した形態をしています。物を洗う行動はよく知られていますが、檻の鍵なども開けてしまうほど手先は器用です。泥上などに残った5本指の足跡は指先の長さから子どもの手形のように見え、他の動物と容易に識別することができます。



アライグマ



アライグマの足跡

アライグマの特徴



1.2 アライグマの食べもの

雑食性で、果実(イヌビワ、アケビ、カキなど)、木の实、昆虫(バッタ、コオロギ)、カエルやトカゲなどの小動物、鳥の雛・卵、魚、エビ・カニ類(スジエビ、サワガニ、アメリカザリガニ)などを餌としていることが確認されています。地上、水辺から樹上まで広い生活圏を持つため食性も多様です。季節的な餌資源の変化があり、大阪府における調査では、夏季は市街地に近い農耕地でおもに農作物を餌とし、冬季は森林でおもに林床の昆虫類を餌としていることが報告されています。また、北海道における調査では、春にはタンパク質となる動物質、秋にはエネルギー源となる果実や脂肪分の多い植物質を選択的に摂取し、積雪期に入って自然界に利用できる餌資源が無くなると、納屋などに備蓄している米や籾殻、麦、米ぬかまで食べると報告されています。さらに、京都府の調査では、郊外や都市では、生ゴミを食べることも報告されています。



クスノキの実



サワガニ

1.3 アライグマの生息地

原産地の北米大陸では乾燥地帯から山岳地帯までほぼ全域に分布するなど環境への適応範囲は広く、日本国内では都会のビル群から農村地帯、人があまり立ち入らない山間部の森林地帯まで広範囲に分布しています。夜行性のため、生息地でもあまり存在を知られないことが多いようです。元来は森林地帯の水辺付近を好み、河川沿いに分布を拡大すると言われています。

北海道における調査では、一晩に必ず1回は水辺に立ち寄るという結果が得られており、本種にとって水場は欠くことの出来ない環境要素であると思われます。冬眠は行いませんが、気温が氷点下以下になると巣穴などでじっとして体力の消耗を防ぐと言われています。行動圏は40～100ha程度で、オスの行動圏はメスよりも広く、複数のメスの行動圏にまたがります。哺育中のメス及び交尾期のペア以外は単独で生活しています。

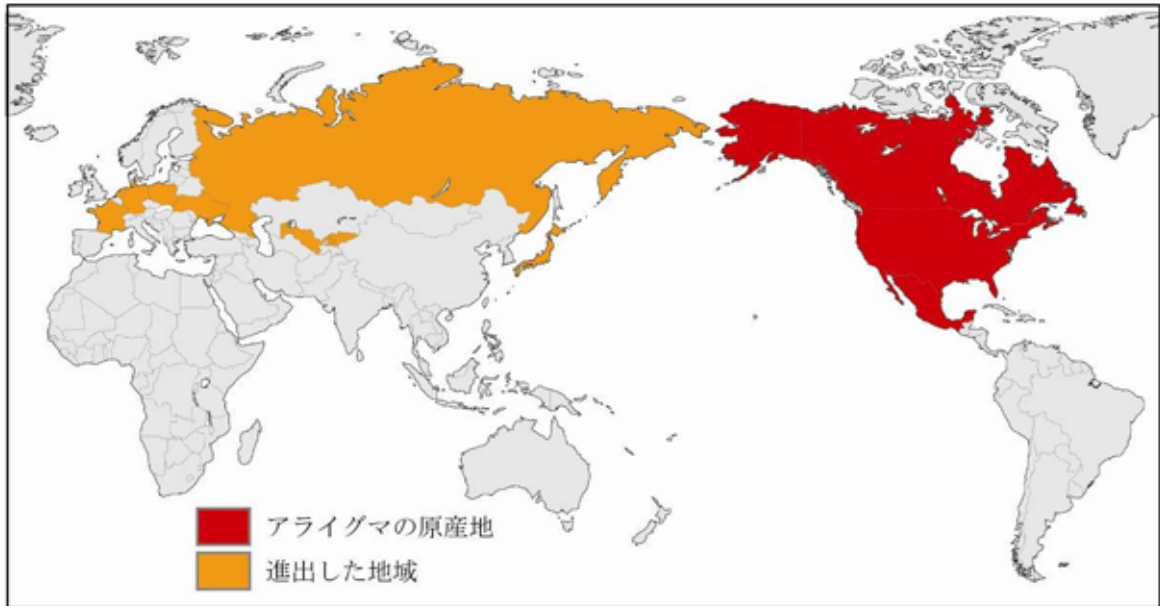


図 1.1 アライグマの世界での分布域

1.4 繁殖と寿命

繁殖場所は高層木の樹洞を利用することが多いことが北海道で観察されています。また、他の動物が掘った穴や岩場の隙間などの地上巢の利用や住宅街や森林環境が不十分な場所では、家屋の天井裏、物置、畜舎、下水管や土管内なども利用しています。しかし、野外で巣やねぐらを特定することは非常に困難です。

交尾期のピークは2月～3月頃、妊娠期間は約60日、出産期はおもに4～5月、産仔数は3～6頭。冬が比較的温暖で餌資源がある程度確保できる地域では、夏期まで出産期間が延長されると考えられており、国内では2月～10月までの期間で出産が確認されています。オスは交尾後すぐに単独生活に戻り、メスは通常2～6個体と交尾する乱婚性の特徴があります。哺育はメスのみで行い、子は生後10ヶ月ほどで独立します。出生年の冬は、母親の巣かその近くに留まり、翌春は早くから独立します。また、オスは生後1年半、メスは約1年で繁殖に参加しています。

寿命は野生で約5年、飼育下で約10年程度。京都府の調査によれば、最長では、野生で16年、飼育下で21年という記録もあります。原産国においては年率50%で増えるとの報告があり、北海道の調査でも、1歳前死亡率は35～48%程度と報告されています。国内では、天敵となる大型肉食獣が存在しないので増加率が高く、短期間に急増する傾向が見られ、実際に目撃情報が出始めた数年後にはかなりの高密度になっている事例が報告されています。